

## 正課外国際教育活動によるグローバル教育実践

—グローバル意識の醸成に向けて—

平井 華代      會田 篤敬

### 1. 学内国際教育プログラム開発の必要性

近年、グローバル化し続ける現代社会において、社会の中で問題を解決し、新たな価値を生み出すことのできるグローバル人材の育成を目指した大学教育の実践が重要視されている。教育の国際化には海外留学をはじめとした海外での教育と、国内で行われる教育（内なる国際化）の二つのアプローチがある（Knight, 2006）。これまではグローバル人材に必要な能力とされる社会人基礎力、外国語コミュニケーション力、異文化理解・活用力を身につけるための絶好の機会として、官民挙げて減少傾向にある日本人学生の海外派遣の促進が進められてきた（横田・小林, 2013）。

しかし、海外留学・研修は、未だ多くの学生にとり身近な選択肢になりえてはいない。その背景には、学生の「海外志向が強い層」と、慣れ親しんだ日本で満足している「海外志向が弱い層」の二極化が指摘されているほか（横田・小林, 2013）、たとえ海外に関心があっても、語学力の不足や家計状況の悪化による経済状況による困難さ、就職活動との兼ね合いによるタイミングの難しさ等により、海外を目指すことに二の足を踏む「海外に関心はあるものの踏み出せない層」の存在があると考えられる。この「海外志向が弱い層」及び「海外に関心はあるものの踏み出せない層」に対する学内における国際教育の役割は大きい。しかし、小林（2011）が指摘するように、日本の大学における国際教育プログラムの開発は諸外国に比べて遅れており、海外への関心はあっても実現が困難な学生への支援や、関心の喚起から必要な学生に対するアプローチがお座りになってきた。学内における国際教育交流経験は、海外留学と同等かそれ以上に学生のグローバルコンピテンシーを高めうることがわかっており（Soria&Troisi, 2014）、学内国際教育プログラムの開発が求められている。

### 2. 地方大学におけるグローバル教育

筆者らの在籍する東北地方I国立大学では、グローバルをキーワードに国際教育プログラムを展開している。グローカリゼーションないしグローバル化という言葉は、1980年代以降に世界的潮流として顕著となった経済や政治のグローバリゼーションないしグローバル化と、それに対抗するものとして1990年代以降にわかに脚光を浴びることとなったローカリゼーションないしローカル化という二つの言葉の合成語として作られたものである。グローカリゼーション（glocalization）すなわちグローバル化という概念は、1980年代の日本におけるマーケティ

ング用語に起因し、英国の社会学者ローランド・ロバートソンがアカデミックな分析に導入した（上杉, 2009）。今日の社会が、全世界を飲み込んでいくような世界普遍化のうねり（globalization）のなかにある反面、地域のもつユニークな特色や特性にも注目していこう（localization）とすることを表現しようとした言葉である（今泉, 2013）。

地方の大学が、グローバルを意識する背景に、地方が置かれている厳しい現状がある。人口減少が地域経済の縮小を呼び、地域経済の縮小が人口減少を加速させるという負のスパイラルに陥ることが危惧されている中であって、地方の大学は、国際的に活躍できるグローバル人材の育成だけでなく、地方創生を担う人材の育成をも期待されている。教育格差や貧困など地域が抱える課題は、持続可能な開発目標（SDGs）にも示されているグローバル目標にも共通している。ローカルでの実感を伴う問題や課題を、構造的にグローバル問題と関連づけてとらえ、新しい社会のあり様をその地域から発想することのできるグローバル人材を育成することが求められている。

また、人口の自然減と若者の都市への流出を背景に、受験生の減少が続いている地方大学において、「地域のニーズに応える人材育成・研究の推進などの各大学の強み・特色をいかした機能強化構想について」（例えば文部科学省, 2014）付与される運営交付金は大学の存続のために重要度が増している。そのため、各大学が知恵を絞り、地域創生に資する教育を展開している。

しかし、グローバルの概念の重要性は十分に認識されているとは言い難く（上杉, 2009）、グローバル教育の実践における知見の蓄積は極めて限定的である。このような背景から、本稿では、岩手大学におけるグローバル人材育成の試みである正課外国際教育プログラムを紹介し、調査をもとに学生のグローバル意識の醸成への効果について考察する。これにより、グローバル教育の発展へ向けた議論の発端の一つとなれば幸いである。

### 3. 学内グローバル教育プログラムの実践

本稿で取り上げる「多文化多言語交流空間Global Village（以下グローバルビレッジ）」は、日本人学生と留学生による国際教育交流を促進することで、「地域に顕在化した諸課題をグローバルな視点から解決し発信できる人材の育成」を行うことを目的として2016年に学内に設置された正課外国際教育プログラムである。留学生と日本人学生との交流は必ずしも自然発生的に生じるわけではなく（加賀美, 2011）、教育的介入者の重要性が指摘されている（川平, 2018）。本プログラムはこの認識に立ち、教員、学生スタッフ、関連部局との組織的連携体制のもと、①国際交流・異文化理解・地域理解を目的としたグローバルイベント、②日本語で留学生と日本人学生が会話をを行う、日本語カフェ、③英語の個別指導を行うEnglish Time の三事業を常時展開している。過去4年間で約600の活動を実施し、延べ約5500名の学生が参加した（平井, 2017; 平井, 2018; 平井・會田, 2019）。

グローバルビレッジの活動には二つの類型がある。一つ目に、海外留学・研修への関心喚起や情報の周知、帰国学生の体験の振り返りを目的とした体験報告会や、留学生の母国紹介やカンファの伝統文化の体験等、国際志向性や異文化理解を促進する「グローバル」志向型の活動である。二つ目に、地域の祭りや生け花といった日本文化や日本語を介した交流、季節の伝統行事の体験やその紹介といった「ローカル」への関心喚起と理解促進型の活動である（表1）。さらに、実施主体や実施対象が「留学生」中心の活動と、「日本人学生」中心の活動がある（図1）。

表1 2019年度活動内容一覧の抜粋

日時	企画名	内容
5月9日	世界一大きな授業 My Education, My Rights SDGs達成へ	教育協力NGO・JNNE共催で世界と日本の教育課題についての公開セミナー
5月16日	国際機関で働こう！グローバルキャリアの築き方	外務省国際機関人事センターによる国際キャリア形成講演会
5月17日	留学生向けごみ分別ワークショップ	学生によるごみ分別方法の説明会とワークショップ
5月30日	Foreign Language Education in Thailand Secondary Schools	タイの高校教員による高校の外国語学教育についての講演会。
5月31日 6月21日 12月9日	留学生によるお国紹介	留学生による、母国の文化や観光地の紹介
6月13日	地域にひろがる、つながる、こども食堂	NPO職員によるこども食堂の取り組みについての講演会。
6月19日	留学の失敗を赤裸々に語る会 トビタテ!留学Japan経験談	留学体験者による個別留学相談
6月28日	七夕ワークショップ	留学生と日本人学生による七夕短冊飾り
6月28日 1月28日	さんさワークショップ	さんさの歴史の説明と踊りの体験ワークショップ
通年	All in English	日本人学生と留学生の共修による英会話ワークショップ
後期	初級日本語教育体験連続講座	授業構成と日本語教育文法に関する講義と模擬授業実施
11月21日	ジェンダーワークショップ/The Impssible Dream ~みんなが思う幸せな家族って~	家庭内における性別役割分担とジェンダー課題を考えるワークショップ
後期	日本の観光地を英語で学ぼう！	学生にゆかりのある土地の観光資源についての発表
1月15日	書初めワークショップ	書初め体験

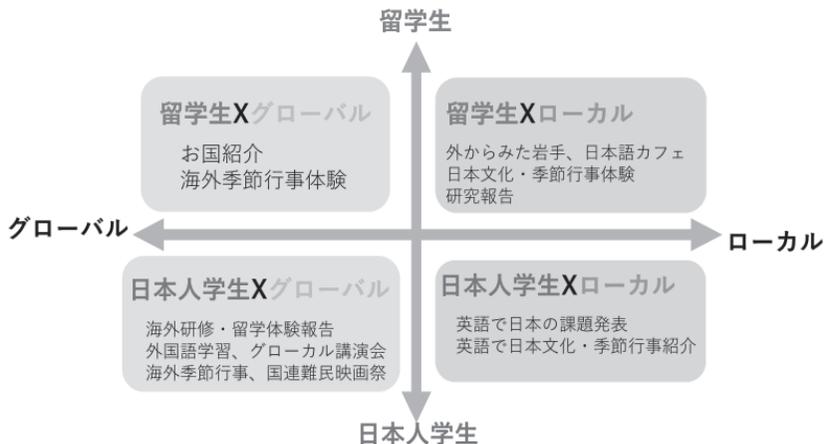


図1 グローバルビレッジ活動類型 (平井・松岡, 2018)

## 4. 研究方法

本調査は、グローバルビレッジが参加学生の海外留学や異文化理解など世界への関心喚起に関わる「グローバル意識」及び、地域活動や地域課題への関心喚起に関わる「ローカル意識」に与えた影響を調査し、それらの関連を探ることで、「グローバル意識」の醸成に与えた影響を明らかにすることを目的とする。質問内容は、グローバル意識に関する5項目と、ローカル意識に関わる3項目に対して「そう思う」から「そう思わない」までの4件法による回答を得たほか、それぞれの項目について「そう思う」「どちらかというと思う」という肯定的な回答に対する理由の自由記述を得た。

アンケート調査は、過去3回以上グローバルビレッジに参加している学部学生を対象に、2020年2月10日～29日、Google Form Webアンケートのリンクを送信し、調査期間中に返信のあった30名の学生について分析を行った。

## 5. 結果

### 5. 1 グローバル意識醸成への影響

グローバル意識については、グローバルビレッジへの参加を通じて「国際問題に対する関心が高まった」「留学や海外プログラムに対する関心が高まった」「留学生と交流する意欲が高まった」「英語学習に対する意欲が高まった」「留学プログラムや国際プログラムに参加した」の5項目により測定した(表2)。グローバルビレッジへの参加を通して大多数の学生が、国際問題に対する関心(76.7%)や、留学や国際プログラムに対する関心(80%)、留学生と交流する意欲(86.7%)、英語学習への意欲(90%)が高まったと答えた(図2)。3人に1名(11名, 36.7%)が、グローバルビレッジ参加後に留学や海外プログラムに参加したと答えたが、これは全国大学生協同組合連合会の調査(2015)による全国平均(大学生の4人に1名が海外経験を有する)を上回る高さであった。

関心を持った国際問題として自由記述中、「持続可能な開発目標(SDGs)」、「人権」や「貧困問題」、「人道犯罪や正義の実現」、「女性の権利問題」、「日韓関係」などがあげられ、世界的規模課題への関心が喚起されたことが示された。また、「グローバルビレッジのイベントは、知らなかったことを知るきっかけや、留学生と話すきっかけを作ってくれる。」「留学生のバックグラウンドを聞いて自分の勉学に励もうと思った。」「(留学生と交流して)自分の当たり前が当たり前じゃないことに気付かされた。」等、活動参加により留学生との交流のきっかけを得て、視野が広がったり、学習意欲が向上したりしていることが示された。英語学習に対する意欲が高まった理由として、「周囲の人々の意欲がみんな高かったから。」「考えたことを英語で言葉に出せるようになることの楽しさを覚えた。」「グローバルビレッジに来ている人は英語などの勉強を頑張っている人が多く、自分の学習の動機づけになった。」等があげられ、高いモチベーションをもった英語学習者と学習する機会を得て、切磋琢磨している姿がうかがえた。実際に参加した留学・海外プログラムの内容は、学内で提供されている課題解決型海外研修(フィリピン、ドイツ、中国、国連ニューヨーク本部等)の他、東南アジア青年の船や民間団体による語学研修やスタディツアー等、学内外の多様な海外研修プログラムであった。以上のことから、グローバルビレッジ活動への参加は、グローバル意識の醸成に好影響を与えていることが示された。

### 5. 2 ローカル意識醸成への影響

ローカル意識の醸成については、グローバルビレッジの参加を通じて「地域の問題に対する関心が高まった」、「地域の活動に対する関心が高まった」、「地域の活動に参加した」に対する回答を分析した（表2）。その結果8割の学生が「そう思わない」「どちらかというと思わない」という否定的な回答をしており、グローバルビレッジの活動参加による地域への関心喚起は一部の学生に限られていることが示された（図2）。一方、肯定的な回答をした2割の学生の自由記述によると、「世界を知る中で、自分の地域や暮らしてきた場所を振り返りたくなった」というグローバル意識の醸成が垣間見られた他、「地域だからこそできること」を模索したいと考え、地域課題としての「貧困問題」や「外国人の地域への移住」に関心を深めたとの回答があった。実際に参加した地域活動としては、「地域の国際交流」や「国際交流ができる授業の履修」などの身近な国際交流事業への参加のほか、地域のNPOが主催する「こども食堂でのボランティア」といった地域活動への参加がなされていた。

表2 グローバル意識及びローカル意識醸成についての回答集計<sup>1)</sup>

質問項目		度数 行%	はい	いいえ	合計
グローバル意識	国際問題に対する関心が高まった	度数 23 行% 76.7	7	23.3	30名 100%
	留学や海外プログラムに対する関心が高まった	度数 24 行% 80	6	20	30名 100%
	留学生と交流する意欲が高まった	度数 26 行% 86.7	4	13.3	30名 100%
	英語学習に対する意欲が高まった	度数 27 行% 90	3	10	30名 100%
	留学プログラムや海外プログラムに参加した	度数 11 行% 36.7	19	63.3	30名 100%
	ローカル意識	地域の問題に対する関心が高まった	度数 6 行% 20	24	80
	地域の活動に対する関心が高まった	度数 6 行% 20	24	80	30名 100%
	地域の活動に参加した	度数 5 行% 16.6	25	83.4	30名 100%

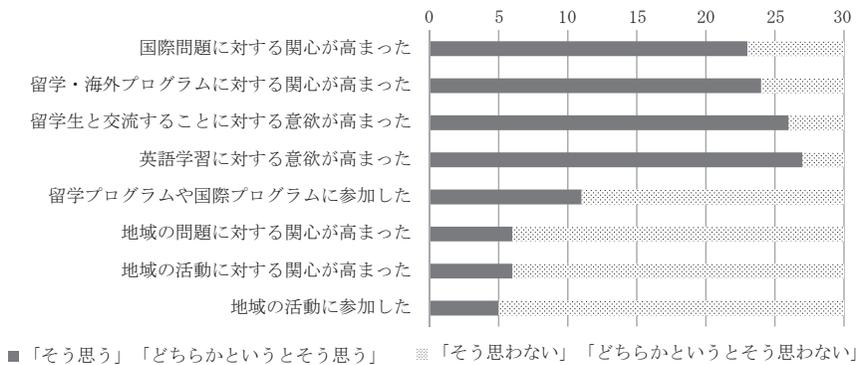


図2 グローバル意識及びローカル意識醸成

1) アンケート調査では、グローバルビレッジへの参加と意識変化の関連を明らかにするため、「グローバルビレッジを通じて国際問題に対する関心が高まった」のように各質問の前に「グローバルビレッジを通じて」もしくは「グローバルビレッジ参加後に」を付した。「はい」は「そう思う」と「どちらかというと思思う」と返答した人数の総和、「いいえ」は「どちらかというと思わない」と「そう思わない」と返答した人数の総和とした。

### 5. 3 グローカル意識醸成への示唆

地域の問題に関心が高まった学生 (n=5) と地域の問題に関心が高まっていない学生 (n=25) のグローバル意識を比較するため、表3の通り、グローバル意識に関する回答の平均値につきt検定を行った。結果は、留学生との交流意欲や英語学習意欲については地域の問題への関心の有無に有意な関連が見られなかったが、留学や海外プログラムへの参加実績は、地域の問題への関心が高まった学生の間で有意に高いことがわかった。さらに、国際問題への関心の高まりにも有意傾向が見られ、地域課題に関心を持つことと世界の課題へ関心を持つことが、学生の中で連動している可能性があることと、地域課題に高い関心をもつ学生は、より積極的に海外に出ていることが示唆された。

表3 地域の問題に関心が高まった学生のグローバル意識<sup>2)</sup>

	地域問題への関心が高まった (平均値)		p値	有意差
	はい	いいえ		
国際問題への関心が高まった	3.8	3.08	0.062	*
留学・海外プログラムに関心が高まった	3.6	3.29	0.076	
留学生と交流する意欲が高まった	3.8	3.46	0.304	
英語学習に意欲が高まった	4	3.67	0.247	
留学や海外プログラムに参加した	1	1.797	0	***

注) p値<0.01\*\*\*, p値<0.05\*\*, p値<0.1\*

一方で、国際問題に関心が高まった学生 (n=22) と、高まらなかった学生 (n=18) の、地域への関心の高まりをt検定にて比較したところ、表4のように有意差は認められなかった。以上のことから、地域課題に関心を深めた学生は同時に海外へも目を向けている一方、逆の関連は薄いことが示唆された。

表4 国際問題に関心が高まった学生のローカル意識

	国際問題に対する関心が高まった (平均値)		p値	有意差
	はい	いいえ		
地域の問題に対する関心が高まった	3.59	2.00	0.364	-
地域の活動に対する関心が高まった	2.32	2.13	0.560	-
地域の活動に参加した	1.82	1.88	0.723	-
留学・海外プログラムに参加した	1.82	1.88	0.723	-

注) p値<0.01\*\*\*, p値<0.05\*\*, p値<0.1\*

海外に出た経験をもつグローバルビレッジ参加学生に、ローカル意識の向上が見られたかを分析するために、留学や海外プログラムに参加した学生 (n=11) と、参加しなかった学生 (n=19) を対象に、表5の通りローカル意識に関する回答の平均値を比較し、t検定を行った。結果は、「地域の問題に対する関心が高まった」「地域の活動に関心が高まった」「地域活動に参加した」のいずれについても、留学・海外プログラムに参加した学生の関心の高まりが有意に高かった。このことから、海外に積極的に出ている学生は、帰国後、グローバル教育プログ

2) 表2, 3, 4において、「はい」は「そう思う (4)」と「どちらかというと思う (3)」の合算の平均値とし、「いいえ」は「そう思わない (1)」と「どちらかというと思わない (2)」の合算の平均値とした。

ラムへの参加を通じて、地域の問題や活動により関心を高め、地域活動により積極的に参加する傾向があることが示された。

表5 留学・海外プログラムに参加した学生のローカル意識

	留学・海外プログラムに参加した(平均値)		p値	有意差
	はい	いいえ		
地域の問題に関心が高まった	2.64	1.95	0.008	***
地域の活動に関心が高まった	2.64	2.05	0.048	**
地域活動に参加した	1.55	2.00	0.001	***

注) p値<0.01\*\*\*, p値<0.05\*\*, p値<0.1\*

## 6. 考察

正課外グローバル教育活動への参加を通じて、大半の学生が国際的問題や留学生交流、英語学習や海外プログラムへの参加への意欲を高めており、グローバル意識の向上への顕著な影響が見られる一方で、地域課題への関心や地域活動への参加等ローカルへの関心を深めた学生の割合は5人に1名と限定的であった。しかし、地域への関心を深めたこれらの学生は、国際的な課題への関心をも深める傾向にあるうえ、より積極的に留学・海外プログラムに参加している傾向が示された。留学や海外プログラムに参加した学生は、グローバルビレッジの活動を通じて地域課題や地域活動により関心を高めており、グローバル意識の醸成がなされている可能性が示唆された。

上記の知見はグローバル教育の実践の難しさとともに、その可能性をも表している。今後は、どのようなプログラムの設計や教育的介入が、地域課題と国際問題への関心喚起につながるのかを検証したい。国際志向性を育むグローバル人材育成と、山積するローカルな課題に向き合う必要に迫られている地方大学において、足元の課題と世界との関連を考える発想力と課題解決へ向けた意識を涵養するグローバル教育の開発が求められている。その発展のためには、教育実践の効果検証と質の向上が不可欠である。今後も調査を続けながら、地域と世界への関心を相関的にはぐくむ学内グローバル教育実践のあり方を検討したい。本稿が、その進展に向けた議論の一助となればと願う。

## 引用文献

- 平井華代 (2017) 「多文化多言語交流空間Global Village」『岩手大学グローバル教育センター・国際連携室報告』Vol.2-2016, 62-66.
- 平井華代 (2018) 「多文化多言語交流空間Global Village」『岩手大学グローバル教育センター・国際連携室報告』Vol.3-2017, 48-55.
- 平井華代・會田篤敬 (2019) 「文化多言語交流空間Global Village」『岩手大学グローバル教育センター・国際連携室報告』Vol.4-2018, 69-77.
- 平井華代・松岡洋子 (2018) 「正課外教育における学生スタッフの異文化対応力育成の試み」, 第29回日本国際教育学会口頭発表資料.
- 今泉礼右 (2013) 『グローバル時代の社会学：社会学の視点で読み解く現代社会の真相』, みらい.
- 加賀美常美代 (2006) 「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか：シュミレーションゲームと協働的

- 活動の場合」『異文化間教育』第24号, 異文化間教育学会, 76- 91.
- 川平英里 (2018) 「正課外における国際教育交流の現状と課題に関する調査—大学教職員の視点に着目して」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』第6号, 17-25.
- 小林 明 (2011) 「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』2011年5月号Vol2.
- Knight, J. 2006. Internationalization of higher education: new directions, new challenges: 2005 IAU global survey report. International Association of Universities.
- 文部科学省 (2014) 「大学による地方創生に関する取組」<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/chiikitf/5kai/siryous3.pdf> (2020年3月31日検索) .
- Roland Robertson (1994) Globalisation or glocalisation?, *The Journal of International Communication*, 1:1, 33-52, DOI: 10.1080/13216597.1994.9751780.
- Soria, K. M., & Troisi, J. (2014). Internationalization at Home Alternatives to Study Abroad: Implications for Students' Development of Global, International, and Intercultural Competencies. *Journal of Studies in International Education*, 18 (3), 261-280. <https://doi.org/10.1177/1028315313496572>.
- 上杉富之 (2009) 「グローバル研究」の構築に向けて：共振するグローバリゼーションとローカリゼーションの再対象化」『日本常民文化紀要』27,43-75.
- 山西優二 (2008) 「これからの開発教育と地域」山西優二・近藤牧子・上條直美『地域から描くこれからの開発教育』, 開発教育協会.
- 横田雅弘・小林明編 (2013) 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』, 学文社.
- 全国大学生生活協同組合連合会 (2015) 「内向き」は本当か? 『2014年大学生の意識調査報告～昭和の大学生, 平成の大学生～』, 全国大学生生活協同組合連合会.

(2020年10月20日受理)